

毛利高棟様と

毛利家の御家族

毛利家執事

橋佐古

義

友

(賛助会員・五所明神社)

先般昭和五十九年九月二十七日に謙光院殿智徳高鑑大居士(俗名高棟)の葬儀を養賢寺に於て執り行いましたところ皆様方の御会葬を得まして、しめやかに無事法要を終える事ができました。御礼申し上げます。

御遺族の泰子様、富士子様は四十八年振り、黒田定子様、伏見和夫、佳子、文孝様は初めての来伯でございます。佐伯の方々もお目にかかるのは初めての事だったと思います。

ところで毛利家について御存知の方は少ないのではないかと思いますので、この際、高棟様と御家族につきまして私の知る範囲で皆様にお伝えいたしたいと存じます。毛利家のお住まいは藩政時代は佐伯の警露館と江戸の

南佐久間町の下屋敷がありましたが、この下屋敷は版籍奉還の際没収された様です。明治四十年に先代高範公が東京都新宿区柏木(北新宿)に家を買って御一家はそこへ移り住んだのです。この屋敷は約六〇〇坪程のもので、広い庭をバックに一〇〇坪程の木造平家が建てられていたとの事。この邸内に後に毛利式速記学校の洋館が建てられました。これら全て東京大空襲で焼失しました。屋敷の大半は後に売却した様です。

御家族は第十三代藩主の高範公と妻賢子様(彦根領主華族井伊直憲公一門の出)に二男五女の御子様達でした。この方々につき簡単に紹介いたします。

●高範公、賢子様は共に御健康に恵まれ、人格、資質優れ容姿端麗で立派な方だったそうです。高範公のご事績は多くありますが、その中に城山の還元、速記学校開設、教育に深い関心を持ち、毛利賞として奨学金を抛出、郷里思いは人一倍強く、修学旅行生が上京すると、皆を華族会館に招いてご馳走をしたそうです。お世話になった方も多いと聞いています。毛利家累代の墓を建立し、昭和十四年六月十二日に御遠行になり、そこに眠られています。

●長女の久子様は明治二十五年七月十九日佐伯で誕生、昭和五十九年一月十二日に東京にて九十一才の長寿をまっとうしています。久子様は侯爵黒田家の分家で男爵黒田長和（貴族院議員）に嫁ぎ、長義、定子の二子を授かっています。定子様は、第四王子伯爵の伏見宮博英王に嫁ぎ、そのお孫さんが文孝様で今度毛利十五代の当主として養子縁組をいたしました。

●長男、毛利高亮氏は明治二十六年十一月十六日に佐伯に生れ、体格は殊に優れ、活発な性格の立派な方だった

そうです。八高より東京帝国大学法学部に進まれ、在学中運動の過重か肋膜炎を起し二十四才の若さで他界しています。本当に御両親は惜まれたとの事です。

●二女、千代子様は明治二十九年一月十一日佐伯に誕生、昭和十二年、軍部、財界に人望のあった近衛文麿氏が内閣総理大臣に推され、以後三回に亘り内閣を組織したが、その近衛公の奥様でありました。

ご性格は気丈夫で、はっきりしたお人柄、スポーツも大好きで、当時ゴルフをなさったような活発なお方でした。

子供さんは二男二女で、次女の温子様は細川侯爵家に嫁ぎましたが亡くなっています。現在二男の通隆氏が東大歴史編さん所を退官され、霞山会の会長として活躍中です。千代子様は昭和五十五年に八十四才で亡くなりました。

●次が二男の高棟様ですが後述いたします。

●三女は泰子様で近衛家の二男秀麿氏に嫁ぎました。秀

鷹氏は近衛楽団の主宰者で近代オーケストラの先駆者でした。二男二女を得て、二男秀健様は現在も音楽家として活躍中です。高棟様の御葬儀に久し振りに帰伯され、昔の幼き頃の事を懐しそうに思い出していらした様です。お歳は現在八十二才ですが、かくしゃくたるものです。います。

気配りの細かな優しそうなお方です。

●四女が富士子様で高棟様の病弱なお体を氣遣って、御両親なき後は家事に看護に努められ、高棟様の延命も、彼女のお陰があったものと信じます。兄のお考えお気持ちを受けて、大変優しく、賢女とし現在毛利家の中核として家の保持に当たっていられます。愛猫家として有名で東京から度々表彰を受けてます。

●五女、喜代子様は明治四十二年四月三日に東京に生まれ、山階宮菊鷹王（妻常子妃は島津家より）の子孫で、臣籍降下による筑波藤麿（靖国神社宮司）の嫁となり、子供さんは常治（早大政経学部助教授）、と登喜枝（松浦家へ）常秀（京都勧修寺住職）の方々が健在でござい

ます。喜代子様は毛利家は長寿の家系にあって敗戦後棄の乏しかった事もあり、ちょっとした傷口に菌がはいり敗血症で三十六才の若さで亡くなりました。

●今年五十九年九月四日に永眠いたしました高棟様は、高範公、賢子様の二男として明治三十二年四月三日に佐伯に生まれました。八歳の頃ご一家は東京に移り住む事になりました。関西汽船を使って別府より神戸へと貨切りの旅でしたが、高棟様が船の中で突然、上げ下げの下痢を起し、東海道線は箱根峠が開通してなく、多くのお荷物に病人をかかえお供の人達も大変だったそうです。後になって解ったのですが赤痢に罹ったのでした。御本人は私は「一度死んだ体でしたよ」と申されていました。それが原因でお体が弱かったのです。

上京しまして学習院初等科に入学し、明治四十四年に中等科へと進学いたしました。この時期に面白い話があります。高棟様は大変読書の好きな方でしたが、多くの本の中にあって仏教の本に巡り会い、厚いむずかしい本を読みこんで読みあさったそうです。その揚げ句遂に出家して仏門にはいりたいと言いだしたのです。お母さん

は大変驚き、学校の主任に話しに行くやら、東禅寺の老師に相談するやらで、やっとの事で諦めさせたという遺話があります。ご両親を大変困らせたそうです。

大正十二年に父高範公が毛利式速記学校を開校しこれを助け、昭和十四年父亡き後同校々長として学校運営に当られました。戦中戦後は国民皆苦勞を強いられ、毛利家も例外でなく、戦争の激しい昭和二十年四月に群馬県多野郡新町に疎開し、昭和二十年五月二十四日の東京大空襲で新宿柏木の家は全焼し、全てのものを失ってしまつた。昭和二十一年に都内三鷹市下連雀にお家を借りて移り住んで、妹様の富士子様と細々と質素な生活を送られていた様です。経済的にも苦しく更に病弱な体で、ある時御本人は「私は羽織乞食」だと云っていました。それでもお元氣な時は近くの井の頭公園での一日二度の散歩は唯一の楽しみだったそうです。生涯闘病生活で人にお会いするのがたいぎであつた様でした。しかしお会いして話しますと、日頃お勉強なさっているのので、話題が豊富で人をそらす様な事はありませんでした。物静かな口調ですが声が綺麗で、氣品に満ちたお人柄を即座に感ずる様な雰囲気でした。

身長は一六五センチ程で瘦身でしたが、骨格はガッチリとしていて、多摩火葬場の隠坊に骨が立派であるとはめられました。これも生前の毎日の食事に、いりこやいわしの様な小魚を好み、カルシウムを長年多量に摂取したからだと思われます。食事は二本博士の二食、しかも菜食主義であつたとの事、健康中心の御食事で海草類は欠かさず、更に黒酢、松葉みそ、豆乳等を常食となさつていた様でした。東洋医学の漢方薬等研究していて、野草や野菜等の効用に詳しかった様です。

お人柄は大変優しい方で、人には勿論、植物にも動物にも慈しみの心の深いお方でした。人格は飽みて高潔で、無欲恬淡、地位名譽の誇示を嫌つたものです。佐伯市に私財を投入して買い戻した城山を、市民・近郷の方々の要請に応えてあっさり寄付、又佐伯文庫・櫓門・三の丸御殿、その他遺品等数多くのものを広く世に開放して来ました。

昭和五十七年五月の城山寄付に対して名誉市民の第一号にはと伺いましたが固辞なされ、城山山頂に高棟様の歌碑でも建てましょうかと持ちかけましたが、もう結構ですとの御返事でした。まあ現在の世相にあっては特異

な方と申しても過言ではありません。謙讓なお方でした。敬神崇祖の念厚くして御祖先の命日法要は欠かさず、各神社にもお供物を届ける有様です。

御病身のお体で自肅自戒の日々を送られておられました。五十三年年々末脳血栓にて倒れ、五十八年一月頃から体力もおち、五十九年九月四日突然心不全で八十五才の人生を静かに朽ちる様に終えられました。文学はお好きで文章も簡略で面白く、和歌、俳句等も楽しんでいました。最後に二、三首を紹介して、高棟様のお人柄と在りし日の生活の様子を偲びたく存じます。

吹く風にやぶるほどの古羽織

我が着しときの叔母の笑い様

食卓に雷鳥の絵を立てかけて

嶺吹く風に食すが楽しも

いかならむ御最後なりとも思い出は

阿々大笑の面影ばかり

昭和五十九年十月十日記

表紙解説

栗林正明寺跡層塔

仏の里と言われる直川村赤木字栗林の杉林の中にある。伝承によれば、中世の頃この地に寺院が建立されていたが、大友宗麟のキリシタン信仰により焼払われたという。寺号は正明寺と伝えられている。

層塔には銘記があり応永十八年辛卯三月十五日（一一四一一）とあり、五七四年前の室町前期の建立である。周辺に宝塔・五輪塔などの遺物が散乱し、埋設しているものも多く、掘れば至る所から出るという。

所有者の話によると、この層塔は昭和二十年頃までは完全な形で存在していたが、終戦後の混乱期に盗掘され、破壊されたとのことである。

現在の塔は、昭和四十七年四月に復元されたもので、原形は五層、実測数値によって復元すると、高さ約三・六mになる。塔身の四面に月輪を浮彫りにし、中に金剛界四仏の種字を薬研彫している。復元時舍利仏が無傷の状態で出土したので、仏舎利の供養塔と判明した。

（『直川の文化財』より）